

## 8月 「小村寿太郎と安井息軒」

日南市教育委員会生涯学習課 元課長 岡本武憲氏

8月の記念館講座は日南市教育委員会元生涯学習課長、岡本武憲様にご登壇願いました。安井家は藩主伊東祐相公の命により天保2年(1831)清武から日南飢肥に移住しました。

飢肥城下に新しく開かれた藩校「振徳堂」、そこで父滄洲が総裁、息軒は助教として教鞭をとり、振徳堂の基礎を培い、校風を醸成します。その時代の弟子の一人が後に「飢肥の西郷」と呼ばれることになる小倉処平(しょへい)です。処平は振徳堂の教師時代に、小村寿太郎の優れた才能に注目し、以来寿太郎を東京大学に進学させたり、米国ハーバード大学に留学させたりします。また寿太郎は後に息軒の弟子の一人、外務大臣の先輩でもある陸奥宗光と出会うことになります。寿太郎は幼少時の振徳堂の校風の影響や人々との出逢いの中で稀代の外交官として大成していきました。

このようなお話を講師は弁舌爽やかに、具体的な資料に基づいて分かりやすくお話してくださいました。



## 9月 『論語集説』に見る息軒の思想

中国湖南大学岳麓書院 特聘副教授 青山大介氏

9月は昨年冬から特聘(とくへい)副教授として招かれ、漢学の中枢、岳麓(がくろく)書院にてご活躍中で本籍が佐土原の青山大介先生にご登壇願いました。と申しましても、折しも台風22号の影響をまともに受け、ご帰国が遅れましたので、9月16日(日)実施予定の講座を18日(火)に延期しての講座でした。

先生は、日本の近代化は西洋から与えられたものではなく、知の巨人安井息軒が準備した知的な土壌があったからこそ近代化がアジアにおいていち早く実現し、法治国家が誕生したことを熱く語ってくださいました。さらに松本豊多という学者が、服部宇之吉という学者の書いた『漢文大系・四書』という著書における息軒の解釈について触れていますが、豊多の宇之吉批判を通じて、項目を挙げながら、息軒の思想について説得力のある素晴らしい講話をしていただきました。

先生は儒学の本場中国の伝統と格式ある書院において、真正面から息軒の思想についてご研究いただいている素晴らしい先生で、是非今後ともご帰国のタイミングをはかりながら講座や記念講演会でさまざまな刺激を頂戴したい先生です。



青山先生には、宮崎日本大学高等学校でも特別授業をしていただきました。タイトルは「**海外で働く理由と意味**」、副題「**中国の大学で中国人学生に中国語で国哲学を教える**」でこちらも大好評でした。

